



(財)国際労働財団

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-23-2 錦明ビル6F TEL.03-3288-4188 FAX.03-3288-4155  
URL: <http://www.jilaf.or.jp> E-mail: [jilaf@ubcnet.or.jp](mailto:jilaf@ubcnet.or.jp)

## 第3回ワークショップは組織化・教育マニュアルの具体的内容を検討

### ジンバブエ・ワークショップおよび2000年度南部アフリカ・プロジェクト評価会議

#### JILAF南部アフリカ・プロジェクト

JILAFは、外務省からの補助金を下に、南部アフリカ4カ国(ナミビア、ボツワナ、ザンビア、ジンバブエ)の労働組合を対象に、労働組合の総合的な組織強化(capacity building)を目的に支援プロジェクトを行っている。JILAFが受け持つ内容は組織担当者および教育担当者の訓練のためのワークショップの開催である。このプロジェクトは、ICFTUアフリカ地域組織(AFRO)との密



ワークショップ開会式であいさつをする  
Chibebe ZiCTU書記長

接な協議・協力の下に3ヵ年計画として1999年度に開始された。1999年度は初年度として各国でパイロット・プロジェクトを行い、それを基に2000年度は、5月に全対象組織の書記長が一堂に会し、地域に適合した自前の組織化・教育マニュアルを作成していくことを決定した。続いてナミビア(5月)、ザンビア(7月)でワークショップを開催し、マニュアルの具体的内容について検討し、その結論をまとめたマニュアル案が今回のジンバブエ・ワークショップ(2001年3月12日-14日)において討議された。

#### ジンバブエ・ワークショップ

ジンバブエ・ワークショップは本来ならば2000年9月開催される予定であったが、主催者

のジンバブエ労働組合会議(ZiCTU)の内部事情により3度の延期を経て、今回漸く開催された。ZiCTUは、政権との関係で内部抗争が続き、本年2月25日に臨時大会を開催、全指導部が一新された。新指導部成立後、初めてのワークショップとなった。開催場所はジンバブエの第2の都市でハラレより南東約280kmのモザンビーク国境に近いムタレであった。

参加者は、ZiCTUから、本部および地方の組織担当者および教育担当者19人。2月25日の臨時大会で新たに選出されたウエリントン・チベベ(Wellington Chibebe)書記長も初日の開会式と午後の議論に参加。更にNUNW(ナミビア)BFTU(ボツワナ)ZaTUQ(ザンビア)からもそれぞれ2名ずつ組織担当者・教育担当者が事情通(facilitator)として参加した。ICFTU-AFRO本部からは財政総務局長のフィデル・ルガンボ氏が参加。JILAFからは藤本勝夫副事務長が出席した。

#### ワークショップ自体が教育の場

3日間に渡って、ナミビアとザンビアのワークショップで作成された組織化のためのガイドブックをもとに検討が進められた。組織化のためのガイドブックはModule1-Module10までの10章に分かれている。世界情勢・地域情勢分析、労働組合組織とは?、組織化の法的枠組み、組織化における労働組合指導者の役割、労働組合における情報・通信体制の管理、労働組合のサービス・活動を広める組織担当者の役割と機能、労使関係、労働組合の戦略的組織化技法、データの収集と管理、労働組合の運営原則の内容を取り扱う、約100ページわたる分厚いガイドブッ

クとなっている。上記の内容に見られる通り、組織担当者・教育担当者の組織化のための技術的内容はもちろん、労働組合とは何か、社会における労働組合の役割とは、グローバル化が労働組合に与える影響など、現在の労働組合運動全般に関わる内容となっているのが特徴である。1ページ毎にスペリング、文法の修正・訂正を含め、内容についても逐次検討が加えられた。その意味でワークショップ自体が教育の場の観を呈した。参加者は20代、30代の若手で、地域で組織化に当たっている者がほとんど。組織の専従で地域を巡回しながら組織化に当たっているという。参加者は実に真剣・真面目で、朝の8時半から夕方7時過ぎまで活発に議論を展開した。

#### JILAF南部アフリカ・プロジェクト評価会議

ワークショップに引き続き、南部アフリカ4カ国の組織・教育担当で2000年度を締めくくるプロジェクトの評価会議が開催され、ジンバブエにおける今回のワークショップの結果をZiCTUは整理する、それを基にして残りの国



「ソリダリティ・フォーエバー」を参加者全員で歌う

であるボツワナおよびナミビアにおいてワークショップを開催して更に検討し、最終版を作成する。両国におけるワークショップ開催後、一般的な評価会議を開催する、ことが確認された。

# 3年目を迎えたインド学習センター インド・コビルパティ

JILAFは、1999年1月に、ICFTU - APROの協力のもと、インド南部のタミール・ナンディー州のコビルパティにJILAF学習センターを開設した。

スタート以来ほぼ2年を経た今、学習センターの運営状況を見学するために、JILAFの山田、山本の2名が、APROのハリダサン・ニューデリー事務局長とINTUQ(インド全国労働組合会議)現地責任者のジャガナジャン氏とともに現地を訪れた。

まず授業を参観した。51名の生徒たちが、洗濯したてのユニホームを着て学習していた。ホールを2つに仕切って、上級生は1クラス、下級生は1つの教室を2つのクラスで使っている。3名の若い女性教師が、美しいサリー姿で楽し



授業風景

そうに教鞭をとっていた。インタビューした生徒の一人は「先生は神様みたいだ」と答えていた。遠来の珍客を迎えたせいもあり、全員が学校生活を楽しんでいるようだった。

今回、家庭訪問の機会はなかったが、関係者の話では、子どもたちの家庭はかなり厳しい貧困状態にあると言う。そのせいで学校に行くことが楽しみにになっている。また、センターには、給食のための調理場があり、我々が訪問した時、係の女性が料理に取りかかっていた。この給食がまた、生徒にとって学習センターに通う大きな魅力になっている。

だが、このセンターの課題も多い。

ある生徒は、「自分には妹が3人いるが、この子らにも学校に行かせたいので、ぜひ、JILAFセンターの生徒数や学校の数を増やして欲しい」と言っていた。だが、限られた資源で、教育のレベルを低下させずに、多くの現地住民の要望に応えていくのは至難のことである。

また、この学習センターを修了した後、児童がふたたび労働の現場に戻ってしまわないように、職業訓練の実施を求めている。例えば、男子には大工、女子には縫製など、また、男女に共通してパソコンの技術訓練のトレーニング教室を開設したいという要望が強く出されている。ここでも、これまでの学習センター自体を拡大するのか、修了者のフォローアップを図るのかの選択が迫られるのである。

この地域では、かなり熱心に児童労働対策が進められている。地方政府も、この近辺に児童労働者のために7つの公立小学校を開校した。また、ILOはIPEQ(国際児童労働廃絶計画)で



「学校に来ることはとても楽しみ」

3つの学校を運営している。これらの学校間でレベルアップの競争も起きているという。

この日の夕刻には、生徒たちへの表彰式と文化祭がおこなわれた。表彰は、生徒たちに登校や学習への意欲を喚起するためである。我々が全員に金属製の器を手渡した。文化祭の始めには、来賓のあいさつが延々と続いた。我々はややイライラしたが、子どもたちは馴れているとみえて黙って座っていたのには感心した。あいさつした面々は地元の労働省高官、商工会議所会頭、労働組合代表などである。ここから言えるのは、JILAFの学習センターが、地元から広く、好意的に受け入れられているということであろう。

最後に、学習センター訪問の途中で、かつてJILAFで活躍された石井龍一チェーンナイ総領事とお会いすることが出来た。氏から、インド南部地域では、今や、IT革命の波にのって、著しい経済発展がみられる現実の説明を受けることが出来た。



神保町  
JIMBOCHO

不思議なことに、インドの太陽は、朝日、夕日ともに、紫がかった空に濃い血の色に浮かんで見える。

インド南部、タミール・ナンディー州、コビルパティの「JILAF学習センター」を訪ねた。これについては報告記事にふれた。ここでは、この地域の強烈な印象をまずスケッチしておきたい。

## ヒンドゥー世界とIT革命

3月とはいえ、30度を越す乾いた暑さ、強烈なスパイスの香りに満ちた食べ物、極彩色でエロチックなヒンドゥーの神々があふれるお寺、色彩豊かなサリーをまとった女性達、哲学者風のヒゲの男達。それに、「人間・聖なるウシ・自転車・バイク・リクシャー・自動車・人が鈴なりのバス」、これらがカーレースをしているような狂騒の極みの交通事情。これらの風物を覆う、臭いと砂ボコリ。でも、すべてが人間くさ

く、興味の奥が深い国であるインドに、すっかり圧倒された。

この辺りは、これまで水が不足し、農業も製造業も興らず、極貧の地域だった。だが近年、ここから多数のIT技術者が輩出し、ITカレッジの新築ラッシュである。それが経済発展の原動力になっている。現地の人々は「未来は明るい」と口々に語っていた。

(山田記)

## 回 廊

## 裾野を広げた活動へ新たな立場から協力



石橋 通宏

## P R O F I L E

いしばし みちひろ  
ILO国際研修センター・労働者活動局勤務  
(イタリア・トリノ在住)  
1965年生まれ。1992年から全電通国際部勤務。94年から96年までICFTU-APROへ出向。96年、全電通本部へ帰任し、97年8月より国際担当部長。同9月より、CI日本加盟協(CI-JAC、現PT-LINC)事務局長、および2000年1月よりUNI日本加盟連絡協(UNI-LCJapan)事務局次長を兼務。2001年1月より現職。

私とJILAFとのお付き合いが始まったのは、今から7年ほど前、1994年冬のことであったと記憶している。

当時、全電通本部(現NTT労組)国際部にいた私は、その年の4月から国際自由労連アジア太平洋地域事務所 ICFTU-APROへ出向した。その出発前、「今後深いお付き合いになるから」と言ってお礼会を開いてくれたのがJILAF役職員の皆さんだった。

ICFTU-APROでは、2年余りの間、主に情報・広報および青年部門を担当したが、一番の思い出は、当時APROがパキスタンで立ち上げた児童労働者のための学校プロジェクトに直接携わったことだろう。ちょうどこの頃、JILAFも児童労働問題への取り組みに着手しており、プロジェクトの実施に向けた最初の事前調査には私も同行した。その後のJILAFの精力的な調査と準備は、1997年、『ネパール学校プロジェクト』として結実し、今、大きな成果を挙げている。

96年6月、APROでの勤務を終えて全電通本部の国際部に帰任した私は、今度はJILAFの活動に国内的に関わるようになった。意外かも知れないが、JILAFとの関係を最も深めたのは、1996年にJILAFが始めた「国際活動家養成コース」だったと思う。

NTT労組(全電通)は、国際分野に精通した人材を育成しようというこのプログラムを積極的に活用し、

現在に至るまで毎年、若手役員を派遣している。しかし今だから言うが、立ち上げ当初はカリキュラムもまだ開発途上で、研修上の問題も少なくなかった。そのため担当者との会合では厳しい意見も言わせていただいたが、それによってプログラムの充実・発展に少なからず貢献できたのではないかと考えている。研修を終えた若手役員は皆、一回りも二回りも成長して戻ってきたことを是非、強調しておきたい。

さて、私は昨年末、長年勤務したNTT労組を離れ、1月からトリノにあるILO国際研修センターで勤務している。これでJILAFとのお付き合いも小休止かと思ったのだが、実は私が所属する「労働者活動局(ACTRAV-Turin)」はJILAFとの間に協力関係があり、研修生の訪日視察を受け入れてもらっている。今年は11月上旬に実施する予定だが、センター側の担当者はこの私。JILAFとの関係は今後も続くのである。

振り返ってみるとこの7年間、私自身の立場は変われども、JILAFとの関係は緊密さを増すばかりであった。このことは、JILAFの活動や取り組みがこの間に大きく裾野を広げ、より幅広い分野で貢献してきたことを物語っている。

そして今、新たな立場から、JILAFと協力できることを嬉しく思っている。

## 「酒とダンスと歌の夜」



私にとってJILAF初の出張となったのが、1月末のモンゴルでのPOSITIVE(安全衛生)会議であった。

モンゴルときいてまず思い浮かぶのは、やはり「寒い!!」ということであろう。特にここ1~2年は、これまでにない雪害(ゾド)



多くの女性がPOSITIVEトレーナーとして活躍

に見舞われ、数百万頭の家畜が被害に遭っている。私たちがメディアを通じて得るモンゴルについての情報はあまり良くないものばかりで、この時期にモンゴルを訪れる私は、周囲から「かわいそうな人」という目で見られた。

みんなに脅されてこわごとと降り立ったウランバートル国際空港。気温は確かにマイナス25、道路も凍結している。しかし、私が最初に目にしたのは、日本人にそっくりの顔をした人々の温かい笑顔であった。日本人と違うのは、ほぼすべての人が毛皮の帽子(あのテレビで良く見るものである)をかぶっていることくらいであろうか。

6日間のウランバートル滞在中、私は終

始「温かい笑顔」に囲まれていた。POSITIVEトレーナーや各県労組議長たちは、その「笑顔」でどんどん私のグラスにウォッカを注ぎ、ダンスに誘う。モンゴルの人々は、噂どおりお酒とダンスと歌が好きである。ウォッカを薄めずそのまま、しかも一気に飲みほしたあげくグルグル回る(踊る)そして歌うという夜が続き、私はふらふらになった。

そんな夜も今となっては良い思い出。今は、みんなの笑顔に会いに、モンゴルを再び訪れたいという気持ちでいっぱい。ただ、今度はぜひ夏の暖かいモンゴルを体験したいものである。

JILAF研修生(NTT労組) 鈴木麻美子

INSIDE  
10<sup>OUT</sup>

インサイド・アウト

省庁・関連組織等の人事異動のため、JILAFの役職員も大幅な入れ替わりとなった。

役員では、山口英一常務が外務省へ戻られ、塚本雅勝常務が退任され、新たに厚生労働省出身の高井定孝常務が就任された。スタッフは、調査広報部の山本久雄部長と支援事業部の飯田恵

子さんが日本労働研究機構へ戻られ、新たに、2月から支援事業部に吉川健治さんを、さらに4月より調査広報部に鳥取幹子部長、交流事業部に前田朱美さんを迎えた。従来からの役職員ともどもよろしくお祈りします。また、交流事業部の伊藤由さんは支援事業部へ異動した。



高井 定孝

この4月からJILAFに参りました高井でございます。

JILAFという組織については、旧労働省国際労働課に勤務していた頃に知りましたが、その具体的な活動については、研修によって初めて内容を知ることができました。事業の趣旨等たいへん崇高であると共に最も基本的なことでもあると認識したところです。

私もこの3月まで労働行政の地方機関である岩手で、労働基準・職業安定・雇用均等の仕事に携わってきましたが、住民との直接係わり合いのある第一線機関重視の考えを基本としておりました。

今後、今までの経験がどれだけJILAFにお役に立てるかわからないが、モットーとしている常に前向きな気持ちで頑張る参りますので、前任の塚本常務理事同様どうぞよろしくお祈り申し上げます。

高井 定孝(たかい さだたか)常務理事



鳥取 幹子

2001年4月1日付で国際労働財団の調査広報部長に任命されました。

これまでは労働問題に関する調査研究機関、日本労働研究機構で、調査研究事業、月刊誌の編集業務、労働情報の収集提供事業などに携わってきました。

新しい組織で新しい仕事に出会うことができ、嬉しい再出発です。ここ10年ほどは国内業務が中心で、もっぱら国内の政治・経済に関心が向いていました。途上国の開発協力という新たな舞台で、世界に目を広げ、新しい仲間とともに共通の理念を追求していきたいと思えます。開発協力活動にいささかなりとも貢献できることは、豊かな国に生きる人間の喜びであり、自分の国を見つめなおすよい機会になることと思えます。

多くの方々との交流を楽しみに、仕事に励んでまいります。よろしくお祈り申し上げます。

鳥取 幹子(とっとり みきこ)調査広報部長 / 日本労働研究機構から出向



前田 朱実

雇用・能力開発機構からの出向でJILAFに受け入れていただき、早くも1ヶ月が過ぎようとしています。奈良県、岡山県、広島県、高知県、静岡県と移り住み国内転居は“おてのもの”と自負していたのもつかの間、東京の人の多さ、通勤ラッシュに「.....」地下鉄の線の多さに「・・・？」と驚きと恐怖！？そして新たな発見！！の連続です。ましてや国際感覚！？？

たるものを備えていない私にとって日々の話題が全く新鮮であると同時に自分の不勉強さを痛切に感じている今日このごろです。

「JILAFの一員です！」と自信をもって言える日をいち早く迎えられるよう一日一日を大切に目標を持って頑張っていきたいと思えますのでみなさまご指導の程よろしくお祈りいたします！！

前田 朱実(まえだ あけみ)交流事業部 / 雇用・能力開発機構から出向



吉川 健治

2月から囑託としてJILAFでお世話になっております。これまでは、NGOスタッフとして主にインドシナ地域で約20年、開発協力に従事していました。

NGOに所属している間、労働組合の方々とも協力関係にあり、確立された民間団体としての労組に強い関心を持っておりました。それだけに、ノンステイトアクターとして長い歴史と実績を有する労働組合によって設立され、着実に事業を展開するJILAFでの仕事に大きな魅力を感じています。

支援事業部所属として、現地プロジェクトである労組支援、インド・ネパールでの児童労働対策のための社会開発事業についてお手伝いさせていただくことになると思いますが、まだまだ労働組合について勉強しなければならないことも多く、皆様のご指導ご鞭撻をお祈り申し上げます。

吉川 健治(よしかわ けんじ)支援事業部

JILAFカレンダー

(2001年3月～2001年5月)

招聘

中国Aチーム 5月8日(火)～5月19日(土)

南アジアチーム 5月24日(木)～6月6日(水)

現地プロジェクト

(日本から専門家を派遣して実施したもののみ)

2000年度事業状況確認及び2001年度プロジェクト打ち合わせ2月26日(月)～3月9日(金) パキスタン、タイ、フィリピン  
インド学習センター実施状況の確認と今後の運営の打ち合わせ  
3月5日(月)～3月13日(火)

ジンバブエ・キャパシティビルディング・セミナーおよび評価会議 3月9日(金)～3月17日(土)

ICFTU-AFROプロジェクト調整会議

3月18日(日)～3月25日(日)カニア

その他調査

ILO協会現地調査およびAFROとのミーティング  
2月26日(土)～3月6日(火) インドネシア、シンガポール

